

# 十二月作品

## 月集スバル



☆今月の四人☆ (小島ゆかり選)

惜しみ、羨しむ 高野 公彦 千葉

煙突がけむりを吐かぬ煙突となりて日本語《湯屋》も亡びぬ

雲見ては菜の花見ては思ひ出す上州土田つちだ八九十はくじゅうの詩を

光陰の《陰》が夜ぞらにかがやきてかたへに明る雲のうすぎぬ  
いくたびも寝返りをして眠り継ぐまだ生きてゐる証しの寝返り  
宮柊二と柏崎驍二、七十四で他界せしこと惜しみ、羨しむ

永遠の曲がり角 故岡 崎 康 行 新潟

コロナウイルス現れてより君もわれも永遠の曲がり角渡れるごとし  
基礎疾患三つを持ちてうがひする少し空気の足らぬうがひを

三倍の感染力とききしよりわれはひたすら人から逃げる

無力だかわれは知らねど入れてをり廊下に詰まつた角かどある空気  
変異株のデルタ株とは知りながら日本のさくら咲くことやめず

折りたたみ椅子 藤野 早苗 福岡

街ひとつ水に沈みぬ天災のおほかた人災なれば瞑る

《退出》をクリック 会議終へしのち帰るさといふ余白うしなふ

一日に二回行つたら千円超支払ふスタバがそこそこにある

真つ青なワンピースすとんと身に落としけさは海にも空にもなれる  
いまの気持ちすこしわかるよ 緘黙の子がきしませる折りたたみ椅子

わが猫 橘 芳 園 新潟

シヨップなら売れ残らむと娘言ふわが猫二十三年生きて死にたり  
さつき尾を踏まれしこともすぐ忘る忘れて生きる猫の生き方  
泥棒と妻よ叱るな泥棒は猫の天与の生きゆく手だて  
しまはずに置く笹団子かじりたる猫を叱らず妻叱りをり

わが猫が死にし日の夜出来過ぎの妻が呉れたる「遺言ノート」



水島 晴子 兵庫

戦中の庭にひらきて花芙蓉つばき薄うす緋いろのものぐらかりき  
いち早く解脱げんごう遂げしか認知力よわれる人の表情やはらか  
あたらしき記憶を拒み脳はもしづかにありて満ち足らふらし  
コロナゆゑ会へないままに死に別れかもねと言ひてこゑ事も無げ  
敬老の日とてホームの老人らハチミツまぶす梅干もらふ

杜 沢 光一郎 埼玉

見えぬたる視野もしだいに暗みきてわが生きの場の狭くなりきつ  
朝刊を取りてはをれど白内障の右目のみにて見出しザツと読む  
新型コロナが地球を変へてゆくさまは新聞の見出しだけでもわかる  
人間社会の非力感におそらく襲はれむ新型コロナの終息の後に  
キリンにも象にも鯨にも高齢と老いはいたらむ生きてしをらば

武 田 弘之 神奈川

出張中平松さんに招かれし大分歌会の記録よいつこ  
招かれて支部吟行を共にせる平松さんの温かかりき  
「コスモス」に妻恋ひの歌詠みつぎて生きたまひけり百歳までを  
スパンワは鸚鵡のことか「鸚鵡島以後」の歌みな鮮烈にして  
遺言のごときコスモス叢書あり「山西省」また「鸚鵡島以後」

仲 宗角 三重

熊野灘荒れ狂ひたる幾日ぞせてしづまれこの一日を  
なにならむ五人の友が死にたりと告げらる山の土地くづれにて  
むかしよりかく荒れたりと古文書を開けば見ゆる地すべりの跡  
むかしよりかくあるものと五人の友山のながれに命奪はる  
昭和の日によく尽くしきと文化庁に黄綬褒章を取りに来よとは

奥 村 晃 作\* 東京

パンデミックに空取り戻す東京の青い青い空大き白雲  
十年來絶えて見ざりし蜘蛛の巣が庭木にいくつ懸かるを見たり  
わが庭に十年ぶりに戻りたる蜘蛛の巣なれば払わずに置く  
蜘蛛の網いに懸かりし蟬の亡骸の羽そのままに二、三日在りき  
青い空真つ白の雲、わが庭に蜘蛛ら戻りてコロナ禍深む

森 重 香代子 山口

誰が造りしわけでもなくて美しき野あり森ありゆきて癒やすまむ  
みづからの声を聴きつつ独り言つぶやくわれよ深く老いたり  
眠いねむい、朝の片付け終はるころコップ一杯の水水飲む  
素直なることは連ねて歌詠まむ深く落ち込みし果に思ふも  
ワクチン接種終へし腕かひなに貼られたり印紙のごとき絆創膏を

日 影 康 子 富山

午前五時に起きて寺庭の草を引く卒寿の夏の草取り安居あんご  
マウンドに雨の泥土を踏みしめて高校生投手は乾坤一擲  
高校野球史に語り継がれむ無観客にて智弁同志の優勝戦は  
使ひ古りし会津朱塗りの汁椀にとん汁よそふ雨の黄昏  
さまざまな雲湧き遊ぶ大空を秋とぞ呼ばん息ふかく吸ふ



古屋 祥子 群馬

体温や血圧測定、体操と水分補給で今日が始まる

惚けたるは言はれた指図そのまんま守りて過ぐす それが良いひと  
さまりごと日々変はりなく繰返す 反省、判断などはしないで  
「今日も無事だったね、なんにも間違えず昨日と同じこと出来たから」  
惚け仲間なか好く共に生きゆかう われはまだまだへにんげんとして

影山 一男 千葉

スペイン風邪に命なくせし幾万のその一人若き村山槐多  
物語をはらむとしてひとつぶの葡萄を食めば蟬のこゑ湧く  
また一人孤独なる死を迎へたり(自宅療養)とふ甘言の下  
この国は二流の国と判明すコロナ禍二年蟬のごとき死  
艶のなき尾長のこゑに目覚むれば百日紅は花降りこぼす

桑原 正紀 東京

傘さしてマスクのをみな三人がおしやべりをするかたはらを過ぐ  
コロナ禍も雨も女のおしやべりを封じられないおしやべり無双  
おしやべりが心のバランス保つこと知れどわれには分からぬひとつ  
永蟄居命ぜられてもおそらくは平氣の平左衛門よわれは  
一言主の神もかくやと思ふまで発語をせずして足らふ日のあり

狩野 一男 東京

東京都立大学となりよかりしが 感染拡大防止協力

次々とあらはれ、名前つけられる。新型コロナ変異ウイルス  
トラベルに行つて帰つてきたらしもよこはま。たそがれ東京カチート  
症状は五十肩なれ言ひにくく、言ひ兼ねてゐる七十の口  
ランプを越えてしまひしバイデンに見捨てられたかアファガニスタン

宮里 信輝 神奈川

O型はかかり難いらし夫婦ともO型すなはち子等もO型  
足裏の君の第二の心臓を押しをりサファイア婚式祝ひに  
変はらない体型いいのか悪いのか初背広いまも捨てられず着る  
河川敷注意書きには團語・西語併記してあり移民多き愛川  
夏の夜うすもの脱がすいけにへのやうに出で来し桃のうすもの

小島 ゆかり 東京

オンライン会議終はりてふりあふぐ秋の夜ぞらはおはあめふらし  
オンライン会議終はればしんとひとり生身の桃を猛然と食む  
車椅子とベッドを移動するのみの母なれど秋のズボンを買はん  
車椅子の母を施設へ見送りて そののちは風の森なるわたし  
風はむかし榎の木、榎はそのむかし旅人、そして旅人は風

木畑 紀子 京都

花と咲くみどりの玉をとりかこむ芙蓉の夢のうつくしき反り  
蜘蛛の網にひろはれし幸よろこびてさくらもみちが微風に踊る  
かたつむりわれに出でよといざなふはもろ葉にそそぐ秋雨の音  
角二本伸ばし殻より半身出しじつとしてをり雨は心地よし  
くさびらの重なりあへる根の脇に傘かたむけてわれもくさびら

島田 暉 神奈川

空襲の記憶は悲しくたびも朝夕たしかむガスの元陰  
うす暗き上野の地下道通るとき靴磨き少年寒ざむと踵つ  
夕焼けに赤く染まれば思ひ出すモンペ姿の少女の顔々  
夏の陽をたつぷり吸ひしすべり台子の泣く声す鳥鳴く声す  
原発は安全などと奨められいくたび降りしかセシウムの雨

大松 達 知\* 東京

このハンコ違いますねえ窓口で労わられおりそんな歳かも  
切手のこと郵券と呼ぶ教員がひとりいるこの部屋のかたすみ  
ここからは君の左がよく見える君は左を向かないけれど  
ほくのなかに集まりすぎたほくがいて下向き犬のポーズでほぐす  
風鈴がときおり鳴りて亡き人を呼ぶようなわれも呼ばれたような

田宮 朋子 新潟

木漏日のおよぶ林の下かげにみづひきの紅あらはれて秋  
長旅をせし雲南の象の群れもとの棲みかに還りしといふ  
鍼治療ののちは瞑眩反応のせみかたゆげに臥せりがちなる  
ざんいろの海ひろがれり百年まへ宮芳平の立ちし砂浜  
端麗に咲きはじめしが曼殊沙華らんのさまに花をはりたり



津金 規雄 神奈川

地中での生の記憶もあらざるかコロナの夏を蟬鳴きしきる  
空蟬の(空)の実体せはしなく飛びめぐりをり猛き陽の下  
不相応な大音響を発しるる一小個体 まひるの夏虫  
そこかしこ無造作きはまる死にざまを曝してあたり みんみん、あぶら  
定められし死への予見のあるはずもなく息の緒断たれしものよ

小山 富紀子 京都

明滅はほたるの言葉東西で違ふと聞けり こは京言葉  
ほうほたる初めてその身とほりし夜いかと思ひしぞほうほうほたる  
よき男の子なればやらすの雨ならむ祇王寺に二人足留めされしは  
尉と姥酌みかはしつづ縁に待つ三五夜中のまんまるの月  
昨夜の夢追へば花野のしらしらと明けほそりゆく松虫のこゑ

清水 正子 神奈川

春はまた来るのだらうか北京化のすすむ香港に翼ひろげて  
中国人ではなく香港人ですと面あげていへりガイドのNさん  
香港の思ひ出たのし椅子借りてわれは長すぎる蛇踊りも見ぬ  
春節の夜にカノープス見しからに目覚めよわれの長寿遺伝子  
あの世めけどまた訪ねたし謎多きシエイクスピアのある蠟人形館

小嶋 一郎 佐賀

ドラマにも違和感覚ゆこの二人マスクを掛けず相向かひるる  
鼻毛こそウイルス防御の砦とぞ三面記事の埋草かこれ  
点けてゐるテレビに視入ることもなし昼餉のあとはいつでも斯うだ  
朝挿して夕べに捨つる卓上の一の花の芙蓉よ宥せ  
昨夜の通夜けふの葬儀に席違へ亡き人憶ふほどほどの距離



後藤 美子 北海道

変異しつつ感染力を増すといふウイルスを越えよ人間の知恵  
いつの日かかかることありきと語らはん長き疫病の二年目の夏  
パイロットランプ眠らずさまさまの機器に頼りて日々の暮しあり  
「必然は偶然の姿で現れる」思ひあたることありてさびしき  
カーテンを微かに揺りて入りくる夜風ひいやり夏過ぎなむか

福士りか 青森

久々に父を伴ふ秋彼岸 墓参ののちの老舗の蕎麦屋  
入店の人数制限あるといふ蕎麦屋に並ぶ 孝行とぞ言へ  
品書きを見るまでもなく天ざると決む秋彼岸祖母の好物  
この店も老いたか蕎麦の香がないと父はましろき蕎麦をすすれり  
ほんたうはふたりで一人前でいい父も老いたりわれも老いゆく

風間博夫 千葉

われよりも遅しきかな妻の腕われよりも多く苦勞のありて  
わが無知をさらけ出させる「そんなこと知らない」厳し妻のひとこと  
自転車が玄関脇に計四台小さき二台をはさんで並ぶ  
死もありたる新型コロナワクチンの接種、覚悟無く打ちてしまひぬ  
接種した身には聞きたくないウワサ人類削減ツール(ワクチン)

田中愛子 埼玉

網戸より入り来る風がときをりを扇風機の羽根ゆるくまはせり  
母の言ふ「十二単」は両口屋「二人静」ね あす送ります  
雨の夜のでんわの声は澄みとほりしばらく耳の奥にのこれり  
まづ「虎」の音が浮かびて「虎杖」に達するまでのひとときの間  
ゑんじゆとふ読みを知りたる槐書房福永武彦の限定本美し

水上比呂美 東京

太筆で「栢榴」といふ字を墨書せりころんころんと卓にころがる  
細筆で「金魚」といふ字を墨書せり二十四ほど集ひてはなれて  
ひらがなのあきかぜといふ字を墨書せり「かぜ」のしっぽに風が吹きたり  
歯ブラシで「梟」といふ字を墨書せり上枝に眠る鳥の横顔  
うす墨で「雲」といふ字を墨書せりむらむら滲みて雨雲生る

鈴木竹志 愛知

新聞に感染者数を確かむる朝の日課も一年半に  
第五波の収まりゆける彼岸過ぎ早くも六波を語る政治家  
朴訥な秋田生まれの宰相の孤独は如何に深かりけむや  
己が身の保身に走る議員らに宰相守る気概すら無く  
胸底を晒すことなく内閣の引き際決めしか孤立の果てに

原賀環子 東京

叫ぶこと忘れてゐたるわたくしにイヤダと叫ぶ二歳のカオル  
「かりうるさん、あたすちんちゃん」仮名のみに話せるチビのお話をきく  
四歳は螺旋髪なでたり据ゑおきし机上の阿弥陀をかるくつかんで  
掛けたての眼鏡をとりてわたくしに素顔を見せるカオル八歳  
棺かつぐ大人にまじり十一の髻の肩は棺にとどかず

水上 芙季 東京

消毒液匂ふ執務室にゐて「仕事しすぎ」と言ふ複合機

窓大き十九階の執務室なれば空まで蛍光灯伸ばふ

感情がひからびさうな夏の果(ブラ)のマークに出会ふ幾度も

もう海に行きたいなどと思はなくなり、と思ひてまた行きたくなる

雲呑の熱で整へられた身が涼しい夜の針子をのぞく

大野 英子 福岡

豪雨後の夏の陽射しはぎらぎらしアメリカ人は報復が好き

雷鳴に目覚める午前四時そしてはじまる長きわたしのひと日

天空を踏んづけふんづけゆくやうな雷雨やんごとなき怒り込め

魂しづめ雨となるべしケイタイに雨量情報ばかりがたまる

最後まで綺麗ごと言ひ質問に答へるなく去るサヨウナラSUGA

松尾 祥子 東京

コロナ禍に四十度の熱続く児を診察し病床を医師は確保す

川崎病即入院となりし孫コロナ陰性に安堵はすれど

三歳児点滴の管につながれて面会は日に一人一時間

「パパがいい」LINE画面に孫泣くも面会者一人にてママが行く

医療もう崩壊寸前さはあれど医師と看護師が児を救ひたり



島田 暉歌集 令和3年6月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

戦あらずな コスモス叢書第1197篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一-14-6

高野公彦歌集 令和3年7月刊 三〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

水の自画像 コスモス叢書第1199篇 短歌研究社

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼二-1-21-506

小島ゆかり歌集 令和3年7月刊 三〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

雪麻呂 コスモス叢書第1198篇 短歌研究社

著者住所 〒184-0004 東京都小金井市本町六-1-101-W302

松尾祥子歌集 令和3年7月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

楯円軌道 コスモス叢書第1196篇 角川書店

著者住所 〒168-0065 東京都杉並区浜田山一-121-14